

公開講座「神戸発学」 暮らしを支え、世界を見つめる

甲南大学

知の散歩

<15>

文学部教授
環境総合研究所長

谷口 文章

今世紀、環境問題はますます深刻化・全地球化してきており、それに伴い環境保全の意識を促すための教育の必要性も高まってきている。
「環境教育」の具体的な内容について。
「環境教育」と言いつとすべし「環境問題を解決するための教育」と捉えられがちですが、そうではなくまず感性豊かな子供たち、若者たちを自然の中で育てることだと考えています」



実践コースで学生たちは稲刈りを体験する

「環境問題とひと口に言いますが、三つの問題に分けて考えるべきだと思います。まずオゾンホールや地球温暖化、砂漠化など、自然環境の問題。それから日本では昭和40年代に公害問題が深刻化しましたが、これは社会

環境問題の基本は「自然」「社会」「心」

環境の問題といえます。そして忘れてならないのが、心の環境の問題です。自然・社会という「外なる環境」の破壊は、心という「内なる環境」の汚染に端を発しているというのが、私の考えです。近頃の「キレる」若者たち、引きこもる若者たちの増加も、彼らが「内なる環境」に閉じこもり、「外なる環境」とのつながりを失っているためでもあるのです」

環境教育の国際ネット

のうちの2ではすでに平成13年から、甲南幼稚園・小学校・中学校・高等学校、甲南大学、また甲南女子中学校・高等学校で環境教育による18年間一貫教育が実施されています。社会との横の連携、そして学校間の縦の連携を図っているということですね。さらに③では中国の北京大学、タイのラジャバト大学、マレーシアのマラヤ大学、カナダのウィクトリア大学との情報・学術交流をすすめています。今後もアジアを中心とした環境教育の国際的なネットワークを広げ、環境教育のグローバル・スタンダード化を目指していきます」

米作りを通して自然のリズム実感

「確かに、子供たちの身の回りから、豊かな自然が失われてきていますね。
「特に季節の感覚が失われています。人間も含めた生命は本来、四季のリズムで成り立っているもの。このリズムの狂いが心の環境に重大な影響を及ぼしています。いま『環境教育の実践』という授業で、学生たちに一年を通じた米作りを体験してもらっています。米作りを通じて自然のリズムとの協調を取り戻すことで、多少心に問題を抱えているような学生でも、自然と治っていくものです」
「自然の中の体験を通じて、心の環境も回復できるのですね。」
「そのような原体験を持つ子供たち、若者たちならば、環境の汚染や破壊に胸を痛め、環境保全活動に積極的に参加する大人に育つでしょう。それが環境教育の目指すところなのです」
「今年の五月、甲南大学環境総合研究所が発足したということですが、今後どのような活動を行っているのですか。」

「研究内容としては、①国土交通省との共同研究として、神戸市北区の『あいな里山公園』のモデルプログラム作成、②環境学の確立と環境教育学ガイドラインの作成、③国際人材育成プログラムの開発と学術交流ネットワークの開発、④研究成果を地元還元するために兵庫県教育委員会と共同の研修会や、実験校・資格研修・養成講座の開催の4つが柱となります。こ



内モンゴルで自然を再認識

「北京大学での国際会議の後、内モンゴルに行き触れた自然が忘れ難い」と。周囲360度の地平線、天の川が両端まで見える澄んだ夜空…
「そのような体験があれば、貴重な自然が今いかに危機に瀕しているかわかるはず」と原体験の重要性を説

く。
1969年甲南大学経済学部卒。大阪大学大学院で文学修士号。81年から甲南大に赴任し、現在、文学部人間科学科教授。今年から甲南大学環境総合研究所所長に。また中国の北京大学、河北大学、北京育達工商学院で客座教授を、カナダのウィク

トリア大学、タイのプラナコン・ラジャバト大学で客員教授を務める。専門分野は哲学、心理学、環境学。大学の動物好き。大学から遠い京都府亀岡市に自宅を構えるのも、動物飼育やガーデニングをゆったり楽しめる自然環境ゆえであるが「いつも携帯とファックスで、現実と呼び戻されてしまいます」と苦笑。

このシリーズへの「意見」「感想」をお寄せください。E-mail: 06-85571131@kaiyoku.com

戸新聞社広告局「甲南大学」係か、〒6

58-8501 神戸市東灘区岡本8丁

目9番1号 甲南大学広報部まで。

第2、第4日曜日朝刊「教育のページ」に掲載します。次回は11月28日、M・L・シュレスタ教授（予定）

企画・制作 神戸新聞社広告局